

被爆の地獄 語らねば

18万人に証言

広島市
梶本さん



原爆ドームの前で、平和への思いを語る梶本淑子さん＝広島市

炎天下にたたずむ広島市の原爆ドーム。終戦から73年目の夏、この地を訪れた被爆者の梶本淑子さん(87)＝同市＝が静かに語った。「ここで一体、どれだけの人が死んだか…。悲しくなります」

1945年8月6日 午前8時15分。真っ

日は、あの日、梶本さんは爆心地から2・3キロの工場にいた。当時は、同市の安田高等女学校に通う14歳。学徒動員で飛行機のプロペラ部品を製造していた。

「助けて」「痛いよ」。しばらくして友人の叫び声で意識が戻った。がれきの下敷きになり、身動きが取れない。「早く抜け出さないと、火事になって焼

かれてしまう」。恐怖の中、何とか中からはい出した。熱線で全身の皮がめくれ、垂れ下がった人々が、まるで幽霊のよう。梶本さんは右腕にガラス片が刺さったまま、下敷きになった友人を助けた。担架に載せて運ぶ際、死体を踏んだ時のぬるっとした感触が忘れられない。放射線を浴びた父は1年半後に血を吐いて亡くなり、母も原爆症で入院を繰り返した。梶本さんは教師の夢を諦め、母の治療費と3人の弟を養つたため、親戚の衣料品店で必死に働いた。「原爆が落ちた日は地獄。でも、生き延びた人間も地獄でした」

1957年に結婚。2人の子どもを授かったが、長く記憶を語ることはなかった。孫か

2018
ヒロシマ
ナガサキ

万4859人(3月末現在)。被爆者健康手帳の交付が始まった1957年度以降で最少年齢は82歳を超えた。被爆者の高齢化は著しい。「原爆がいつ、どこに落ちたのか。知らない若者が増えている」。19年前、がんや胃の3分の2を切除。やせ細った体で、記憶の風化を防ぐと証言を続け

(白杵大介)